

# 休憩所

になってしまった件

3

# 「試し読み版」

# 僕の部屋がダンジョンの

## 1 仲間が増えてマンションの部屋に帰ってきた件

2LDKで月3万円。僕は東京の立川市としては激安のマンションに引っ越したのだが、その安さの理由はすぐに分かった。

部屋の玄関が、なんと異世界のダンジョンに繋がっていたからだ。

ダンジョンで出会った異世界人である女騎士のリア、魔法使いのデイト、白スライムのシズクと仲良くなったのはいいけれど、部屋に居座られるようになってしまった。

さらに集金に来たNNK職員の江波さんが、今度は逆に僕の部屋から異世界に行ってしまった。そのうえ危険なオークと間違えられて冒険者ギルドから討伐の依頼が出ってしまった。

僕はリア、デイト、シズクと、討伐の依頼をせめて捕獲の依頼に変えてもらうために、マンションの玄関と繋がるヨーミのダンジョンの地下5層から地上の冒険者ギルドを目指した。

途中、地下1層のスラム街で助けた孤児のニツクとメアリー、盗賊ギルドのミリイとも同行することになったが、ようやく地上に出ることができた。



ダンジョンの秘密出口は小山の上にあった。

「とにかく山を降りて街に行きましよう！」

リアの意見に賛成だ。この小山の眼下にはヘラクレイオンの街が見える。小山の空気は美味しいし、自然は美しいけど、このぐらいの景色なら地球のヨーロッパ辺りの田舎にならありそうな光景だった。

パノラマの青空の下、歩いてヘラクレイオンを目指した。



ここが異世界の街か。ヘラクレイオンは街ごと壁に囲まれて、いてその中に市街がある。

往来には金髪のみならず、赤髪や青髪、ピンク髪、それにミリイよりもっともふもふの獣人や二足歩行のトカゲまでいる。車の代わりに時たま馬車を通った。

——異世界だな。おそらく地球人類史上初めて異世界の地上に来たんだ。

感動をリアやデイトに伝えたいのだが、僕が日本人であることを知らないミリイがいるのが残念だった。

「よし！ まずは冒険者ギルドで、江波さん討伐依頼を捕獲依頼にするという仕事をチャットと片付けますか」

とつとと用事を片付けて異世界を満喫しよう！ ところがデイトが不満を言いました。

「え〜いきなり冒険者ギルド行くの〜？ もう疲れたよ。とりあえず宿で休まない？」

「いやいやダメでしょう。早く冒険者ギルドに行かないと！ 江波さんが討伐されちゃったら終わりだよ」

興奮で全く眠くならない。いろんな所を回ってみたい。

「でもさあ。ほら」

デイトが後ろを向くと、幼いメアリーが背におぶさって寝ていた。意外と子供の面倒見がいい。リアと手をつなぐニックも眠そうだ。

とりあえず、2人を寝かせるために宿に行くしかなさそうだった。

冒険者用の宿に着いた。石造りの宿で、部屋には4つのベッドがあって居心地も悪くない。

「悪くないね〜4つもベッドがあるってことは冒険者パーティー用の部屋ってことか」

「でもトオルの寝袋の方が気持ちいいわ〜この宿は夕飯が出るからそれまで寝ましょう」

どうやらデイトはベッドの上でさらに寝袋を使って寝るつもりらしい。

「何それ！ この素材は？」

ミリイがデイトトの使っている寝袋を見て興奮している。

「うるさいわねえ。眠いんだから静かにしてちょうだい」

まあ寝袋はあったとしても、化学繊維できていて寝袋なんて異世界にはないだろう。

「僕の使っているよ」

「いいの？」

ミリイもベッドの上に寝袋を置いてその中に入り込んだ。

「あったかい。何これえ……」

ミリイは早くもスヤスヤと寝息を立て寝てしまった。

ニックとメアリーも2人で1つのベッドを占拠しているので、残ったベッドは1つしかない。リアと顔を見合わせる。

マンションの部屋では2人で寝たこともあったが、真銀の剣が戻ってきてからは1度もない。

「ど、どうしましょう？ 私、寝袋やぐらで床に寝ましようか？」

「い、いや。そんな。ベッドも結構広いしさ」

「ベッドも広いし？」

一緒に寝よつかと言えなかった。

「せ、せっかく街に来たんだから、夕飯までリアに街を案内してほしいなあ……なんて」

「はい！ いいですよ！」

リアの満面の笑みが返ってきた。

夕食には帰ると書き置きして、2人で宿からそっと出た。

でもよく考えてみると自分は街を散策しなかったが、リアは疲れているかもしれない。

「トール様に街を案内できて嬉しいです」

「え？」

「ほら私、トール様にお世話になりっぱなしなので」

「そんなことないよ」

「そんなことありますよ。だから今日は一緒に私の世界を楽しんでくださいね」

いろいろあつて、まだリアと2人で日本の街を歩いたことはない。

今度、リアが日本に来た時は、絶対に案内してあげよう。

「まずは神殿に行きましょう」

「え？ 神様にはあんまり興味が……」

女騎士と異世界でデートかと思つたら、いきなり宗教の勧誘をされた。

「ううう。これが現実か……悲しい」

「まずは早く神殿に行つて、共通言語を身につけましょう！」

「え？ なんだって？」

リアの話を詳しく聞くと、異世界人のテレパシー言語は一種のスキルらしい。

もともと持っている自分たちの国や地域の言語に、翻訳付きのテレパシー効果を付与しているのだ。

モンスター言語⇨日本語でも、スキルによる効果を付与すればいいだけらしい。

「ニックやメアリーとも普通に話せるようになるの？」

「はい。そうです」

ニックやメアリーは冒険者ではないのでモンスター言語が分からなかった。

神殿に行けば、すぐに話せるようになるらしい。しかも意識してオン・オフが可能とのこと。

日本に帰ったらオフにすればいい。なんて便利なんだ。異世界。

しばらく異世界の町並みを歩くと、進路上に一際大きな建物が見えてきた。

やはり、どこことなく地球の教会を思わせる。

「ひょっとしてあれが神殿？」

「はい」

「大きいんだねえ」

「お布施がたくさん入りますからね」

なるほど。聞かなくても分かった。

きつと共通言語を付与してもらうのにもお布施を払わないといけないのだろう。

「神殿には僧侶の方もいて、神聖魔法で傷を治してくれますからね」

「どうやら病院の役割もしているらしい。」

「じゃあ僧侶の冒険者とかもいるのかな？」

僕はちよつと期待に胸を膨らませて聞いた。女僧侶、それは女騎士に勝るとも劣らぬロマン。しかし、リアは驚いたような顔をする。

「う、うーん。僧侶の冒険者ですか？ 聞いたことはありませんが、いるかもしれませんね」

「え？ だって治癒の魔法を使える人が冒険のパーティーにいたらすごく助かるじゃない」

「確かに助かりますけど、神聖魔法を使える人なら危険な冒険をしなくてもいくらでも仕事はありますので。それこそ神殿で絶対に雇ってくれますし」

「た、確かに……でもレベルは？ レベルを上げるために冒険者をやる僧侶さんはいないのかな？」

「治癒魔法で傷を治していけばわざわざかながら経験は入りますし、もちろんスキルレベルは普通以上に上がっていくので」

「そういえば、スキルレベルについてそんなことも聞いた気がする。お金になるスキルを持つ



ている人は危険な仕事はしないのか。妙にリアルというか日本と似ている異世界だった。

神殿の内部は静謐な雰囲気を醸し出していたが、あまりにも訪問者が多くて、実際には喧騒に包まれていた。

ぱっと見、一番多いのは、やはりなんらかの怪我を負っている訪問者だった。男女に分かれて列をなしている。

「なんで男女に分かれているの？」

嫌な予感がする。リアが教えてくれる。

「怪我の治療魔法は外科的処置も含まれるので、男女で別々に治療するのです。男性の怪我人には男性の僧侶が、女性の怪我人には女性の僧侶が付くはずですよ」

嫌な予感の中でした。もし僕が怪我を負ってここに来たとしても、男の僧侶によって治療されるらしい。

「ところで外科的処置も含まれるってどういうこと？」

「えっと例えば、折れた骨にそのまま神聖魔法系列の治療魔法を使つたとしても曲がった状態でくっついたら大変なことになりますよね」

「なるほど」

この辺もリアルだった。少なくとも神聖魔法系列の治療魔法は、元の形に体を治してしまう

というわけではないらしい。ある程度、外科的な処置をしたうえで治癒魔法を使つたならば、確かに男女を別けた方が問題は少ないだろう。

「ちよつと！ アンタ！ どうして傷に入った砂利も洗わないで治癒魔法を使つたのよ！」

「ご、ごめんさーい」

「私がやるから向こう行つて！」

女性の列から怒鳴り声と謝罪が聞こえてきた。

リアはそれに合わせたように言った。

「だから治癒魔法は魔法のセンスだけではダメなんです」

「よく分かつたよ」

声しか聞いていないけど、さつき謝罪していたような女僧侶さんからは治療されたくない。

それにしても、本当に訪問者がとぐろを巻くように列を作っている。魔物がいる世界だから怪我をする人も多いのだろう。

これなら、治癒魔法ができるならば、冒険者などやらなくても十分に稼げるだろう。

怪我人の列は混雑していたが、言語にテレパシー効果を付与する列は3、4人しか並んでいなかったから、すぐに自分の番になった。モンスター言語を話すと警戒されそうなので、リアに代わりを頼んだ。

「すみません。この方は辺境の出身なんですが、〃共通言語〃のスキルをお与えください」

「分かりました。金貨2枚を神殿にご寄付ください」

リアが出そうとしたが、僕は日本で換金しなかった分の金貨を出す。

「はい。女神ナリアの祝福により、そなたは〃共通言語〃を使えるようになりましたぞ」

「なにもされた感じがしないなあ。日本円にして2万円をタダ取りされたんじゃ」

「こ、これ……もう聞こえていますぞ。罰当たりな。ところで日本円って何？」

げっ。どうやらそれと意識せずに、もうテレパシー言語になっていたらしい。リアと平謝りして神殿を出る。

「すごいな、〃共通言語〃。これで、聞き取りはできなくてもアマゾンの奥地にいる部族にも意思を伝えられるのか」

「どうですか？ トール様の世界も便利なものがいっぱいありますが、私の世界もすごいでしょっ？」

リアが嬉しそうに言った。

「うん。すごいすごい。でも戻ったら日本人に間違っって使わないようにしないとね」

「すぐに慣れますよ」

どうやらリアは僕に喜んでもらいたくて、まず神殿に連れてきてくれたようだ。

「なあ。リア」

「何ですか？」

「リアがこの世界で僕と行きたいなああって思う場所ない？」

「え？ 神殿も行きたかったです」

「うんと、そうじゃなくてさ。僕のためっていうよりも、リアが楽しめる場所に行きたいんだ」

リアは小さく頷いた。言いたいことがわかってくれたようだ。

「私が行きたい所……そうですね。騎士団はもう解体してしまいました」

「他には？」

「冒険者ギルドは皆で行った方がいいでしょうし、子供たちがいる孤児院は隣町ですし」

「もうちょつと遊びっぱい所でもいいかも」

真面目な性格が災いしてか、リアにとつての義務や仕事からみの施設しか出てこない。

「あ、そうだ。今日は……アレやつてるかな。もしアレをやつてたらツール様と見に行きたい

……です」

「なになに？ アレって？」

リアは顔を赤らめて目をそらす。

「場所は神殿です……」

「また神殿？」

「もっと小さな神殿です……」

「ところでアレって？」

「いえ、やっぱりいいです。ツール様には楽しくないと思いますし」

「え？ 行くよ行くよ。連れて行ってよ」

リアは「でも」とか「やっぱり」とか言い続けていたが、本当はその小さな神殿にすぐ行く  
きたいようだ。

何が行われているのかは分からないが、僕も行ってみたい。

どうやら先ほどの神殿や僕たちが泊った宿はヘラクレイオンの街の中心街にあったようだ。

リアの案内で段々と庶民の街、もっとはつきり言えば貧しい人がいる住宅街へと足を運ぶ。

少し不安になってきた頃に、地球で言うところの教会のような鐘楼しょうろうが見えてきた。

巨大神殿とは比べ物にならない小さな神殿だったが、音楽が聞こえてきた。

「何だろう？ なにかの楽器の音楽が聞こえてくるけど」

「やった！ やった！ 今日休日だからひよっとしたらやっているかもって思ったんですけど、ベストタイミングです！」

ずっともじもじしながらここまで僕を連れて来たリアが大興奮している。

僕の手を引いて神殿の入口に行き、受付の人に銀貨を2枚渡す。

「行きましよう！ 行きましよう！」

ひょっとして異世界のバンド演奏かなにかだろうか。

意外とリアはミーハーなどところもあるんだなど微笑ましく思う。

神殿に入ると、そこまで広くない聖堂の扇状の席には多くの人が座っていて、僕らは一番後ろに座った。

先ほどの音楽はこのパイプオルガンのような楽器が奏でていたのだろうか。

「しかし、バンド演奏にしては厳せきかで落ち着いた……」

「あ、来ます！ 来ます！」

「来ますって？ あっ？」

どうやら僕は完全に勘違いしていたようだ。

聖堂の視線が集まる中央の右手から、地球とは少し違うが白いドレスを来た若い女性が、左手からはやはり正装と一目で分かる衣装を着た若い男性が入ってきた。

「結婚式……だったのか……」

「はい！ この地域の市民の方の結婚式は、銀貨1枚で誰でも入れるんです」

地球でも牧歌的な地域で、知らない人でも飛び入り参加できる結婚式があったような気がする



る。

「ひょっとしてリアは何回か来てるの？」

そう聞くと、リアは恥ずかしさを取り戻したようにもじもじした。

「たまに……休日……催されてる日は毎日……」

それはたまにとは言わないだろう。

主家がお取り潰しになって、その主家の元領民の子供たちの面倒を見ているリア。

彼女にとって銀貨1枚で見ることのできる結婚式は唯一の娯楽だったのかもしれない。

「では新郎新婦は女神ナリアの前で誓いの儀式を」

誓いの儀式？　なんだろうと思っていると、新郎と新婦が顔を近づける。あ、それが誓いの

儀式ね。

重なった瞬間。

「ひゃあっ！」

リアがおかしな声をあげる。彼女を見ると、真っ赤な顔を下に向けながら新郎新婦を上目遣いでチラチラ見ては、また下を向いていた。





リアと神殿を巡った次の日の朝。

朝食を食べてからディートと冒険者ギルドに向かった。

「やっぱり日本のご飯の方が美味しいわ〜」

「そう？ 宿の夕食のトマト味のもつ煮込みは美味しかったけどな」

「トンスキホーテで売っていた紅から鍋の方が美味しいよ」

「アレは日本でも流行<sup>は</sup>っているチェーン店とのタイアップ商品なんだよ」

僕とディートは江波さんの討伐依頼を取り下げてもらうために冒険者ギルドに向かっていた。討伐依頼を取り下げてもらって、同時に捕獲依頼も出しておけば完璧だろう。搜索依頼ではないことには目をつぶる。

子供たちは冒険者ギルドに連れて行かない方がいいだろうということになって、リアとミリイが面倒を見てくれている。

「ところで江波さんの討伐依頼ランクEの報酬って、いくらぐらいもらえるの？」

「ものにもよるけど、ガディウス金貨で3枚ぐらいじゃないかしら？」

や、安い。

別に高かったら仕方ないというわけでもないが、日本円にして3万円で殺されたら江波さん

も浮かばれないだろう。急がなくては！

「ディート、急ごう」

「別に急ぐ旅じゃないし、ゆっくり行きましようよ」

「急いでいるんだって！」

それでもダラダラ歩こうとするディートを急<sup>せ</sup>かす。

「もう、なんなのよ！　せっかくトオルとデート気分を楽しんでいたのに！」

「え？　そうなの？」

「そうよ！　どうせ昨日はリアとイチャイチャしてたんでしょっ！」

当たらずとも遠からずかもしれない。

「ご、ごめん」

「ふんっ！」

ディートがこうなってしまうと機嫌を取るのが大変だ。

クレープがない異世界では放っておくしかない。

無言のまま歩いていくと、昨日の神殿ほどは大きくないが、そこそこの大きさの石造りの建物に着く。

物に着く。

中を除くと、どうやら酒場もあるようだ。

「ここ？ 冒険者ギルドって？」

「そうよ」

デートは先に建物の中に入ってしまおう。

「ちよ、ちよっと」

「もう共通言語は話せるんでしょ。あとは受付と勝手に交渉しなさいよ。私はお酒でも飲んでいるから」

建物に入ると、ギルドの受付だろうカウンターと、冒険者に昼間から酒を出すためだろうカウンター席があった。

僕はギルドの受付だろうカウンターに向かい、デートは酒を出すためのカウンター席に向かった。

「す、すいません」

ギルドの受付嬢は眼鏡のおかっぱ女性だった。

「初めて利用するのでいろいろ聞きたいんですが」

「はいはい」

話は聞いてくれるようだが、なんだかやる気のなさそうな返事だ。笑顔も全くない。

「ギルドに仕事を依頼したいんですが」

「え？ 仕事をするために冒険者としてギルドに登録する方じゃなくて、仕事を依頼する方ですか？」

「そ、そうですけど」

受付嬢は急に笑顔になって、名前をエミリアと名乗った。

「僕はツールっていいいます」

「それでツール様、本日はどのような依頼を？ 葉草の採取ですか？ モンスターの討伐ですか？ 何か欲しい素材でも？」

「えっと、ダンジョンのモンスターの捕獲なんですけど、できますかね？」

「はい！ もちろん！ 冒険者ギルドには地下牢もありますから。捕獲したら連絡をするオペシオンもお付けできますよ」

地下牢か。ちよつとかわいそうな気もするが、討伐されてしまうよりもマシだろう。

「じゃあ、お願いします。ヨーミの地下5層に出るオーク2匹組なんですけど」

エミリアさんと話し込んでクエストの詳細を決めていく。

ちなみに、冒険者に金貨10枚の報酬を払う場合は、ギルドに手数料として2枚、成功した場合は成功報酬としてさらにギルドに3枚払うらしい。

つまり、依頼があつて、それが達成された場合、冒険者が受け取る報酬の半額がギルドに入

る。

依頼を達成できなくても、手数料で2割は確実に入ってくる。

「オークは結構強いですからね。捕獲依頼ランクCかな？ 冒険者に金貨で20枚ぐらいが相場ですかね」

「とうとうと、総額で金貨30枚か」

ううう。金貨30枚か。痛い。

だが自分で捕獲してしまえば、報酬の20枚は自分に返ってくる。

先にギルドに金貨30枚を預けないといけないが、手数料の金貨4枚を除いた26枚は返ってくるのだ。

「牢屋の使用料は2日で金貨1枚、連絡をする場合はお使いクエストを冒険者に頼むとして銀貨が……」

どんどんお金がかかっていくが、仕方ない。

「あ、ところで実はそのオークには、先に討伐依頼ランクEがかかっているらしくて」

「あくそういえば」

エミリアさんが酒場の掲示板から紙を1枚剥がして持ってくる。

僕には読めない文字だ。

「これですね、オークの討伐に金貨2枚の報酬。ひどいな」

「どうやら江波さんの命は3万円ではなく、2万円だったらしい。」

「ダブルブックキングすることはよくあることですよ。気にしない気にしない」

「いやいや気にしますよ。僕は捕獲してほしいんです」

「そうですか」

「ギルドとしても成功した時の報酬は僕の方がいいじゃないですか。こっちは取り下げてもらうわけにはいきませんか?」

「じゃあ依頼者の……お嬢様冒険者のルシアさんか。ちゃんとした捕獲依頼が出たので取り下げたらって言うておきますよ。でもどうして金貨2枚でオークの討伐依頼なんて出したんだらう?」

「お願いします」

「多分、契約を迫られてうざかったとかそんな理由だろう。」

「しかし、できれば直接取り下げる交渉をしたい。」

「そのルシアさんっていますか?」

「僕は酒場の方を指差して言った。」

「昼間だというのに多くの冒険者が酒を飲んでた。その中にデートがいるわけだが。」

「うーん。今日はいらっしゃってないみたいですね」

「そうですか」

残念ながら今はこれ以上、できることはなさそうだった。

ディートを探す。カウンター席に座ってお酒を飲んでいたので隣に座る。反対側を向かれた。「ふんっ！ 私に地上まで案内させて、私のお金使って」

「その通りです」

香りからして相当強いお酒を飲んでいるようだ。完全にできあがっていた。

確かに世話になりっぱなしだ。まあ、江波さんのせいなんだけど。

「ディート、付き合うから美味しいお酒を教えてよ。あんまり強くないので」

「リアとはデートしていたくせに、私はほっというて！」

お説教はまだまだ続くようだ。

と、思っていたら。

「あ、あの、魔法使い……のディートさんですよ？ 魔法ができる人がいないので、僕たち

とパーティーを組んでくれませんか？」

急にディートが若い冒険者たちに話しかけられた。

ダンジョンで見た冒険者と比べると装備が綺麗なので新人かと思ったら、レベルは20、18、

17もあつた。

話しかけてきたのは、人物鑑定をしたところ、レベル20のドミニクさんという騎士だ。きっとリーダーだろう。

ちよつと、いや、かなりイケメンかもしれない。しかも爽やかだった。連れている他の2人は女性だった。

後ろの丸テーブルに座っている冒険者たちの声が聞こえる。

「新進気鋭のドミニクチームがいったかあ。元はどっかの騎士団にいたらしいぜ」  
「どういふことだろうか？」

「あ、ごめんね。私、彼とパーティー組むことにしたの」  
「え？」

デイトが僕の腕を掴んで微笑む。

「ね？ トオル」  
「あ、ああ」

よく分からないけど曖昧な返事をする。

ドミニクさんは残念そうに去っていった。

後ろの丸テーブルからまた声が聞こえてきた。



「ドミニクならって思ったけど、やっぱりダメだったか」

「皆、一度はあの美貌とレベルを誘うんだけどな」

段々と話が見えてきた。

デートが有名人というのは本当らしい。

「ところで隣に座っているヤツ誰だ？ 見たことない顔だな」

「本当にデートと組んでいるのか？」

「ま、まさか。冗談だろう。レベルも10だぞ」

後ろのテーブルに聞き耳を立てていると、デートの酒臭い怒り声が聞こえてきた。

「私の話、聞いているの!？」

「聞いているよ」

全然、聞いていなかった。

「トオルはもっと私に優しくしなさいよ」

「デート殿でしょうか？」

今度は耳が尖った2人の男が話しかけてきた。エルフだ！

「はじめまして。私はエクムント。こっちはエルマーだ。見て分かると思うが、なかなか人間

とパーティーを組むことができぬ。どうだろうデート殿、一緒に」

「あーごめん。私はハイエルフだし、同族意識とかないから。それに人間の彼と組んでいるの」  
やはりデートが僕にピツタリとくつついて微笑む。

エクスメントさんたちも去っていった。

「機嫌、直してくれたのか？」

「直してないっ！ 大体トオルはっ！」

「デイ、デートさん、僕とパーティーを！」

それから次から次へと、デートにパーティーのお誘いが来る。

そのたびに僕を理由に断っていた。

「今日はいつにもましてデートへの勧誘が多いな」

「昔のデートは、話しかけてきたら殺すオーラ<sup>グ</sup>が出ていたけど、今日はなんか……可愛い感じだもんな」

「そうそう。俺も声かけようかなって思っちゃうもんな。ところで、まさか本当にあの冴えない感じのヤツと組んでいるのか？」

「まさか、そりゃないだろ。皆、冗談だと思ってるから次々と声をかけているんだろ」

後ろの丸テーブルのヤツらに冴えないと言われてしまった。悪かったな。

それにしても昔のデートの、話しかけてきたら殺すオーラ<sup>グ</sup>ってなんだよ。おっかない

……。

僕が後ろの丸テーブルの噂話を聞きながら、デイトの説教を聞き流していると、今度は少女がデイトの傍らかたわらにやってきた。

人物鑑定をすると、マロンというレベル5の狩人だった。

いかにも駆け出し感がして初々しい。美少女とまでは言わないが、そばかすが可愛かった。

「あ、あのパーティーメンバーを募集しているんですけど、ご一緒にどうですか？」

「ごめんね、間に合っているわ」

女性だったからか、デイトは僕を引き合いに出さずにアツサリと断る。

「ゆ、有名なデイトさんをお誘いなんかできませんよ。私が誘ったのはこちらの」  
少女が僕を見る。

「え？ 僕？」

「はい！ よかったら2人でダンジョンの2層を探索しませんか？ そこそこの値段で売れる薬草が生える秘密の場所を知っているんです」

「え、えへへへ。困ったなデイト、どうしよう？ げえええっ？」

これが冒険者たちの間で噂になっているデイトの話しかけてきたら殺すオーラがつてやつだろうか。

## 2 訳アリ物件のお祓い騒動な件

「あゝねむいゝあゝたるいゝ」

ゾンビのような動きで、僕は職場のファミレスに向かっていた。

どうしてゾンビ化しているのかというと、3日間もほとんど寝ずにクリックでモンスターを狩っているからだ。

実はリアもデイトもミリイも異世界に帰ってしまった。リアは孤児院のためのお金をダンジョン探索で稼がないといけないし、デイトはダンジョンマスター情報を集めに行き、ミリイは盗賊ギルドの首領としての仕事と立場があった。

僕の方から彼女たちに会いに行こうかなとも思ったが、異世界の旅には危険がともなう。

安全のためにレベル20になってから会いに行つて、皆をビックリさせようと思つている。

それで必死にクリックレベル上げをしていたら、ハマってしまったのだ。

「江波さんが邪魔してくるから自動レベル上げができなくて困っているんだけど、手動でついにレベル16まで上げたぞ」

ダンジョンでメモした紙をポケットから取り出す。

ふふふ。大分強くなったな。きつと皆、ビックリするぞ。

【名前】	鈴木透 <small>スズキトモ</small>
【種族】	人間
【年齢】	21
【職業】	無職
【レベル】	16 / ∞
【体力】	51 / 51
【魔力】	67 / 67
【攻撃力】	132
【防御力】	47
【筋力】	28
【知力】	44
【敏捷】	29
【スキル】	成長限界なし 人物鑑定LV4 / 10 道具鑑定LV1 / 10 棍棒技2 / 10

棍棒技つていうのがちょっと格好悪いけど、ピッケルばかり使っていたからだろう。そういえば握力計で測ると【筋力】28の数値の4倍になるから……一体、今いくつだろう？ いかん、思考力が完全に落ちてきている。帰ったら3時間、いや2時間ほど寝てから狩りをすることにしよう。

——ピロリンピロリン

我が職場ファミレスに入った際になる電子ドアベルだ。

ウチではバックヤードから入っても防犯のために鳴るようになっている。

「あ、鈴木君おはよ。ど、どどどうしたのその顔？」

「あゝ店長ゝおはようございます」

「目の下真っ黒だよ。そんなクマ見たことないぞ。大丈夫？」

「あゝ大丈夫、大丈夫っすよゝ」

大丈夫と主張していたら、なんだかハイテンションになってきた。

「さあゝ今日も頑張りますよ！」

店長と久野さんが僕を見て幽霊物件がなんだとかヒソヒソと話しているけど、どうしたんだろっか？

考えるのが面倒なので放っておくことにした。

更衣室に入ると知らぬ間にキッチンの服を着ている。

「あれ？ まあいいや。さあ今日もガンガン料理を作りますよ」

キッチンに立った途端、次々と注文が舞い込んでくる。

初めのうちは寝不足からの妙なハイテンションで仕事をこなしていたが、すぐに燃料が尽き始める。

体が重い、眠くなる。

いや、いかんいかん。真面目にやらなくては。キッチンで寝るなんて許されないぞ。

しかし、どうにもまぶたが重い。

なんだか視界が……暗くなってきた……。

……

……

……

「お疲れ様です」

「お疲れいっ」

あ、あれ？ 気が付くと、ファミレスに来た時の服を着てバックヤードの休憩所にいた。

どちらが社員でどちらがアルバイトか分からない店長と、三十路ぐらいの女性で気の強い久

野さんが挨拶していた。

久野さんはもう仕事をあがるのだろうか？

確か今日は僕と同じ時間にあがるハズなんだけどな。

「鈴木くんもお疲れい」

「え？ あ、あれ？」

「な、なによ。どうしたの？ 鈴木くんホントに変よ。今日ちよつと空いてる？」

休憩所の時計を見ると午後4時だった。あれ、僕もあがる時間だぞ。

気が付くとバイトが終わっていたのだ。

「なんか鈴木くん、キッチンでも首をカクンカクン体に引っ張られるような動きだったし。

仕事は完璧だったけど」

久野さんがまったく記憶にない僕の仕事の様子を教えてくれた。

あつ。ひよつとして！

「シズク？」

僕が名前を読んだ瞬間、着ている服が小さくプルプルッと震えた。

そういうことか。つまり僕はシズクを着て職場に来てしまったのだ。

そして、キッチンで寝てしまった僕をシズクが動かしてくれていた。



「シズク、なんて可愛いんだ」

僕はシズクを褒める。

ところがシズクはプルプルッと困惑の震えをした。僕はもうシズクの震え方で気持ちがかかる。

でも、褒めているのになんで、シズクは困惑しているんだろうか？

「店长、鈴木くんがついに独り言を」

「やっぱり間違いなく幽霊物件だね」

「うん。目の下に真っ黒なクマ作ってるし、キッチンでの動きも変だし、シズクが可愛いとか

独り言を言うし……」

げええええええ。店长と久野さんが心配そうに僕を見ていた。

どうやら独り言とバイト中の動きを不審に思っていたようだ。

シズクの困惑の震えの原因はこれか。

「鈴木くんっ」

久野さんが急に僕の名を呼んだ。

「空いているなら、ちょっと一緒に帰らない？」

こりゃ完全に誤解されている。

「あ、あーいや。別に大丈夫ですって。ははは」

「大丈夫ですじゃないわよ。行くわよ」

久野さんは僕の腕を掴む。

「じゃあ、店長！」

「うん。鈴木くんを頼んだよ」

彼女は店長に挨拶して、僕を連れてバックヤードの出口からファミレスを出るのだった。

「ちよっちよっと、どこに行くんですか？」

引っ張られる方向は僕の家の方だったが、微妙に遠回りをしていた。

「寺よ」

「寺?」

聞いた瞬間は意味が分からなかったが、しばらくして話が読めてきた。

どうやら店長と久野さんは、僕が事故物件の霊障れいしょうにでもかかっていると思っっているのだろう。そんな厄介な人間にここまで優しくしてくれるなんて嬉しくもあるが、完全に誤解だ。

「大丈夫ですよ。幽霊とかさういうのではありませんから」

ゴブリンとかスライムとか女騎士とかエルフの魔法使いとか出てきますけど。

「いいから、ついてきなさい。お祓はらいか、場合によっては本格的な除霊をもらおうからね」

「えええ？」

お祓い？ 場合によっては本格的な除霊だって？

視界に立派なお寺が見えてきた。普段は気にしていなかったが、この辺りには確かにそんなお寺もあった。

いやいやいや。オカシイと思われるだけならまだ良かったけど、除霊とか……。

「莫大なマニーがかかるのでは？」

古来宗教はお金がかかるものと相場が決まっている。

「大丈夫、あやめちゃんが無料でやってくれるそうよ」

「あやめちゃん？ ああ……」

久野さんが言うあやめちゃんとは、バイトの同僚の女子高生、立石あやめに間違いないだろう。

女子高生なのに全くキャピキャピしたところがなく落ち着いている。だが美少女だ。クールビューティーと言っていいだろう。

僕にはちよっと冷たかったような気もする。最近はどうでもないのだが。そんなことより。

「待ってくださいよ。なんで女子高生の立石さんが除霊なんてできるんですか？」

「あやめちゃんは寺生まれよ」

「そ、そうだったんですか？ 知りませんでした。寺生まれでTATEISHI……完全に寺生まれのTさんじゃないか！」

「彼女、靈感とかすごいから」

ほ、本当だろうか？ まあ、本当に靈感があるなら、すぐに誤解だと分かってくれるだろう。久野さんは境内けいだいに入っていく。

寺のお堂の裏はちよつとした森のようになっていた。

「あっ」

立石さんが僕らをじつと見ていた。

なんと白装束しろしょうくである。しかも濡れている。彼女の後ろには井戸らしきものが見えた。

「し、白装束……その上、この時期に井戸水で水浴び……」

本格的だった。本格的な除霊だ。久野さんが彼女に近づいていく。

「ね？ 休憩時間に電話でも話したけど、鈴木くん目の下とかヤバイっしょ？」  
いや。これはただの3日間徹夜した寝不足のクマだからね。

靈感があるなら分かってくれるよね？ 立石さんは厳おそかに言った。

「鈴木さん、このままでは危険ですよ」

立石さんの靈感が疑わしくなってきた。



寺の本堂の木の床に正座する3人。

立石さんも久野さんも真剣そのものだった。

でも僕の服になつている1匹スライムはお寺の雰囲気が好きなのか、興味深いのか、楽しそうに微妙に震えていた。

寺の本堂でノリの良いリズムを刻む悪霊がいるわけがない。

「いやだから誤解だつて」

「いえ完全に霊です」

お寺の本堂の中で、水浴びをした白装束の和風美少女から真剣に霊だと言われたら、多くの人が信じてしまうだろう。

僕ですらシズクがノリの良いリズムを刻んでいなければ、うっかり信じてしまいそうだ。

立石さんは無料らしいが、お金好きの僧侶だったらきつと莫大なマネーを要求したに違いない。

異世界でも日本でも神殿は儲かりそうだった。

### 3 異世界大冒険の件

ファミレスのバイトが終わると、僕はタコ焼きを買って急ぎ足でマンションに向かった。「おかえりなさい。ご主人様」

金髪の美少女が僕を迎え入れてくれる。

しかし、リアではない。シズクだ。

なぜならリアもディートも、今朝にはダンジョンに再び向かったのだ。

リアは地下1層である十字傷のダンさんと合流することになっていて、一緒に4層に行つて古代樹の花を採取するらしい。

ディートは僕の部屋と繋がっていきそうな、6層や7層の鉄の扉の部屋を探すらしい。

というわけで、僕の部屋にはシズク以外いるわけがないのだ。

「ただいま〜シズク〜。リアの変身はしてくれなくていいよ」

「え？ ディート様の方がよろしかったですか？ それともミリイ様？」

「そういうことじゃなくてさ。リアはリアの人格だからいいんだよ。ディートやミリイもそうだよ」

「ご、ごめんなさい。人間は表面的な姿形を望んでいるだけだつて白スライム族では言われて  
いて」

うーん。やはり白スライム族は相当悪用されたんだなあ。僕は絶対にそんなことしないぞ！

「ご主人様、素敵です」

「え？」

「リア様たちの性格がお好きだつていうご主人様が大好きです！」

……お堅<sup>かた</sup>くないリアや、性格のめっちゃいいディートや、お淑<sup>しと</sup>やかなミリイも、ちよつとだけ見たい気がしていたことは内緒にしよう。いや皆の性格はもちろん好きなんだけどね。

「それなら心音<sup>ココロネ</sup>ミルならどうでしょう？」

「歌姫ソフトの？」

「はい。心音<sup>ココロネ</sup>ミルなら人間じゃないですし、これといつて決まった人格があるわけじゃないか  
らいいのでは？」

「でも心音<sup>ココロネ</sup>ミルはただのイラストだしなあ。ドールもあるけど」

前にシズクが心音<sup>ココロネ</sup>ミルに変身した時は、人形として変身したただけだしな。

もし人間サイズになつて動いても、残念ながら気持ち悪いんじゃないだろうか。

「心音<sup>ココロネ</sup>ミルを人間にしますよ」

「え？」

「イラストやドールから、不自然にならないように人間として再現できます」

「お、お願いします！」

「はい」

こ、これは悪用じゃないよね。

シズクがリアからいつものスライム姿に一旦戻る。そして人の姿に再構成されていく。

まずスラッとした白いマネキンの姿になって、すぐに美少女の姿になる。足まで届きそうな特徴的なサイドテールが作られて着色されていく。

「す、すごい……」

「どうですか？」

「完全な心音ミルだよ！」

「えへへ」

いや、現実にいる心音ミルココロネと言うべきか。

目の前の心音ミルココロネと比べたら、有名コスプレイヤーのそれですら足元にも及ばないだろう。

素晴らしい。しかし、なんだか緊張してしまう。憧れのリアル心音ミルココロネを前にしてなにをす

ればいいんだろうか。あ、そうだ。



「シ、シズクのためにタコ焼きを買ってきたんだよ」

「タコ焼き?」

「う、うん。美味しいよ」

僕は心音ココロネミルもといシズクをテーブルの前に座らせてタコ焼きを開けた。

シズクとわかっていても心音ココロネミルの一挙一投足にドギマギしてしまう。

「わくわくしても美味しそうない。ありがとございます!」

「で、でしょ」

「どうやって食べればいいんですか?」

僕が日本の食事の食べ方を実演するのは恒例となっている。

緊張していたからか、なにも考えずにタコ焼きを楊枝で差して一口に口内に入れてしまう。

「あちちちちちっ」

「だ、大丈夫ですか?」

一口噛んだ瞬間、内部のトロツとした具材のあまりの熱さに流しに吐き出して、一個無駄に  
してしまった。

「大丈夫……ちよつと油断した……少しだけ火傷したけど」

「火傷!? 大丈夫ですか?」

「ちよつとだよ。全然大丈夫」

水を飲みながら口内を冷やす。

「タコ焼きつて熱いんですね。危険です」

「そうでないものもあるんだけどね。僕が一気に口に入れたのがいけなかったんだよ」  
僕がそう言うのと、テーブルの向かいの椅子に座っていたシズクが隣の椅子に座る。

「え、え？ 何？」

「シズクがふうふうして差し上げますね」

な、なんだって？ 心音ココロネミル姿のシズクがタコ焼きをふうふうしてくれる。

二次元の美少女には決して濡れた唇が熱いタコ焼きを冷ましてくれていた。

「これで冷えたかな？」

「た、たぶん」

「まだ分かりませんよ！ 気を付けないと！」

「でもどうやって調べる？ 温度計なんてないよ？」

「失礼して……」

心音ココロネミルの唇がタコ焼きを半分にする。

「うん。これなら大丈夫です。それにとりつても美味しいです。半分になってすいませんが

……」

「えええええ!？」

半分食べたタコ焼きを差し出される。

「また、火傷したら……と思ひまして。でも食べかけなんて嫌ですよね」

ココロネ  
心音ミルに扮したシズクが悲しそうな顔をする。

「いやいや全然、嫌じゃないよ。食べる食べる。冷ましてくれてありがとうね」

ココロネ  
心音ミルが半分食べたタコ焼きを食べるのに緊張しただけだ。

「じゃあ、あーんしますね」

「あーんもしてくれるの?」

「はい!」

こりゃ悪用されますわ。

「ご主人様、あーん……」

ん。もぐもぐもぐ。

「美味い。けどちよつと冷え過ぎたかもしれない」

「ごめんなさい。じゃあもう一度ふ〜ふ〜しますね」

「うむ」

「はい。ふ〜ふ〜」

シズクはやはり味見をする。

「うん。今度こそちようどいいですよ。あ〜ん」

ん。もぐもぐもぐ。ちようどいい温度のタコ焼きとソースの美味しさが口の中に広がっている。

「う〜ん美味しい。シズクもう1個ちようだい」

「待って、ご主人様。お口の周りにソースがついてらっしゃいますよ」

シズクが心音ココロネミルの白くて長い指で僕の口の周りを拭う。そして指についたソースをペロツと舐め取った。

「はい。ご主人様、綺麗になりましたよ。うふふ」

リアたちがいなくなつてからシズクの間人に気に入られるという本能がますます發揮されている気がする。

「ど、どうも」

「ふ〜ふ〜。うんちようど良いかな。はいご主人様、あ〜ん……」

こうして全部半分ずつ食べて、至福のタコ焼きタイムは終わった。

食べ終わると夕飯時になったが、タコ焼きを食べてしまったのでまだお腹が減らない。

日課のクリックレベル上げをすることにした。

隣ではシズクが楽しそうに様子を見ていた。ただ今日はいつもの白スライム姿ではなく心音ココロネミルだったが。

「うーん。さすがに中々レベルが上がらなくなってきた。デイトも加速度的に上がらなくなるって言っていたもんなあ」

それにまた熱中し過ぎて睡眠時間を削って目の下にクマを作るのもマズい。

「お風呂に入ろうかな」

お風呂はいつもシズクが洗つといてくれている。お湯を張ればいいだけだ。

引越する前はシャワーだけで済ませることも多かったのだが、シズクはお風呂が大好きなので、ケチケチしないで湯船に入ることになっている。

ガデイウス金貨もあるし、シズクと一緒に入るのも楽しい。

「ご主人様、今日もお風呂と一緒に入っていいですか？」

「いいよん」

「やったー！」

僕は気軽に返答してから、パソコンのモニターを消してシズクの方を見……。

「まだ心音ココロネミルやん！」

「え？　そうですけど？」

「いやいやいや、それはちょっとマズいんじゃないの？」

「なにがですか？」

「やっぱり悪用されちゃうぞ……白スライム……」。

「だって服も心音ミルココロネを再現しているけど、入る時は服のまま入らないよね？」

「はい。再現したもので服のまま入ったらご主人様が不快だと思いますし。裸になろうかと」

シズクに対してなんとか普通の状態に保ってあげたいと思っている。

なぜならシズクが大きくなったアレを恐れるのは、白スライムが人間に悪用された悲しい記憶のためかもしれないからだ。だが……僕の精神力ではとてもムリだ。

「ダメダメ」

白スライムの姿に戻ってくれと言おうとした時だった。

「あっそうだ。シズク名案を思いついちゃいました！」

「め、名案？」

「はい！　ご主人様は先にお風呂に入っていてください」

心音ミルココロネはニッコリと微笑んだ。



「ふ〜いい湯だなあ」

最近はいつもシズクと入っているから、久しぶりに1人で湯船に浸かった気がする。

「しかし名案ってなんだ？ 見当も付かないぞ？」

まあ賢いシズクのことだ。名案と言うなら名案なんだろう。

「ご主人様〜準備ができたのでシズクも一緒に入りますね」

準備？ どんな準備だ？

磨りガラス越しに見えるサイドテールは心音ミルのもではないだろうか。

だが服の色が聖紺色せいこんのような。まさか!!

浴室のドアが開いてしまう。遅かった。

「リア様のスクール水着をお借りしてきました」

スクール水着を着た心音ミルココロネ姿のシズクが浴室に入ってくる。

予想通りにヤバイ！ 耐えられるか!?

「シズクはいつも裸みたいなので、スクール水着を着るのが逆に恥ずかしいです……」

完全にアウトになってしまった。どうすりゃいいんだよ？

心音ココロネミル姿のシズクがかけ湯をして、数10秒後には湯船に入ってくるぞ。

そうだ！ 近くに置いてある入浴剤を湯船に入れる。前にシズクと買っておいただ。

「あ、入浴剤を使うんですか？ シズクそれ大好きです」

「う、うん。そうそう」

心音ココロネミルが微笑む。僕もなんとか愛想笑いをした。

湯船の水が乳白色になるタイプだから……うん、元気になったアレを隠すことができた。

シズクがかけ湯を終えた。

「一緒に入っていいですか？」

いつも一緒に入っているのでダメだとも言にくい。しかし水の中でアレがシズクに触れたら怯えさせてしまう。僕は背中にシズクが入れるスペースを作った。

「ど、どうぞ」

「はい」

気配と音でシズクが湯船に入ったことがわかる。

狭いので心音ココロネミル、いやシズクの足が背中にあたっている。

僕はさらに浴槽の中を前進した。前進してもすぐに壁がある。

「ご主人様、丸まっちゃってどうしたんですか？」



「いや……別に……」

「それじゃありラックスできないですよ。こちらにいらっしやってください」

シズクが僕の首に手を回して自分の方に引っ張った。

「わわっ」

軽い抵抗も虚しく、僕は背中中でシズクに持たれかかる形になる。

心音ココロネミルの薄いスク水ごしのポヨンポヨンな胸が僕の背中のクッションになり、ムチ足が肘

置きになった。

20万円もすることでも有名なアーレンチェアでも、きっとこれほどの座り心地ではないだろう。

座ったことないから分からないけど。

シズクが僕の側頭部に心音ココロネミルの頬をスリスリと擦り付けてくる。

「気持ちいいですね〜ご主人様」

「うん……そうだね……」

最高だ。永遠に座っていたい。そう思ったのだが、すぐに熱くなってきた。湯船から出ないとのぼせてしまう。

しかし、僕は相変わらずシズクを怯えさせる状態だった。

白スライムのシズクは熱さにも強いのか、湯船の熱さは問題ないようだ。

## 4 休憩所は使う順番がある件

凶悪なモンスターに苦しめられていた開拓村を助けてから、僕は連休のたびに異世界に行くようになった。

今や冒険者の真似事をするのがちよつとした趣味になっている。

「トールさんのおかげで本当に助かりました！」

「いやいや僕はみんなについて行っただけだから」

今は冒険者ギルドの酒場で出会ったパーティーと畑を荒らすモンスター退治をして、また冒険者ギルドの酒場に戻ってきたところだ。

「トールさんがジャイアントボアをすぐに倒してくれなかったら誰か怪我してましたよ。でもデスグリズリーを倒したんですから楽勝でした？」

「熊鍋も美味しかったけど、猪鍋も美味しかったね」

「ははは。トールさんは食べ物の話しかしないですね」

「そうかなあ。ははは」

リアもデートもないので、難しい依頼は受けない。

冒険者ギルドの酒場でよく情報を集めて、自分のレベルで安全な仕事だけを、レベルの低い冒険者と受けている。

だから、やり込んだネットゲームで初心者ゲーマーを助けるような感じだ。

「明日の冒険はどうしようか？」

「トールさんがいればハガーアントが湧いちゃった魔法石の採掘場も行けるんじゃないかな」  
パーティーのリーダーの戦士さんが聞いて、知恵袋的な魔法使いさんが答えた。

「あ、明日はダメなんだよね」

「え？ トールさん。何ですか？」

「ファミレスのバイトがあるんだ」

「ファミレスのバイト？」

異世界人であることは秘密にしているが、ファミレスのバイトと言っても分からないだろう。単純にお金を稼ぐだけなら異世界の金貨を換金した方が早そうだけど、やはり日本の仕事はちゃんとしないとね。

お世話になった冒険者パーティーに別れを告げてダンジョンに向かった。

「今日も楽しかったなあ」

「うふふ。よかったですね、ご主人様」

スライムアーマーになってるシズクと話しながらダンジョンに向かう。

僕がよく使うダンジョンの出入り口は街の外にあるし、ギルドの酒場からだど2時間ぐらい歩かなくてはならない。

どこかにオフロードのバイクでも隠しておこうか。ガソリンはタンクで運び込んでおけばなんとかなるかもしれない。免許はないけど。

ダンジョンに降りて僕の部屋に繋がっている鉄の扉の近くまで行くと、黒いとんがり帽子と黒いマントをした女性が扉の前を行ったり来たりしていた。

どこかで見たような気がする。

「あそこにいるのデイトさんですよね？」

シズクも気が付いたようだ。

「だよね。何してるんだろう？ まあともかく声をかけてみよう」

僕はデイトの後ろに立って声をかけた。

「デイト！」

デイトはビクツとした後に振り返った。

「ト、トオル」

「なにしてるの？」

「べ、別に」

なんだか歯切れが悪いし、様子もおかしい。

「なんか変だよ？」

「そ、そうかしら？ 普通よ」

「まあ、こんなところで話しているのもなんだから、部屋に来なよ」

ダンジョン地下1層のここは、よく言って寂れた繁華街、悪く言えばスラム街だ。立ち話は避けた方がいいだろう。

僕は秘密を持っていることもあるし。

「わ、私は行けないから……」

「へ？ 行けない？ なんでさ」

ディートが泣きそうな声を出す。

「だってギャンブルで負けちゃって……」

地下1層にはカジノもある。そこで大負けしたんだろう。しかし、それと僕の部屋に来れないことにどんな関係があるんだろうか。

ん？ まさか、ひよつとして……。

「いいからおいでよ」

「だって」

僕はディートの手を引つ張りながら言った。

「お金なんていいからさ」

「ホ、ホントにいいの？」

ディートはいつも、僕の部屋に来る時は金貨を置いてくれる。

僕としては異世界の冒険や換金のために受け取っていたんだけど、彼女は僕の部屋に来るために必要だと思ってしまったらしい。

一番凶々しいと思っていたディートが一番義理堅かった。

もう自分でも異世界でお金を稼いでいるし、そもそも……。

「ディートが来てくれることが嬉しいんだから、お金とかいらないし、関係ないんだよ」

正直、勝手にいられて迷惑な時もあるが、今はこう言っておく。

「ト、トオル……」

「ひょっとしてお腹も減ってるんじゃないの？ トンスキホーテにチョコバナナクリームのクレープでも食べに行こうよ」

「うん！ 嬉し〜！」

ディートは僕の腕を取った。たわわなポヨンが二の腕に当たる。

「肥えたブタから奪え」

いつもの合言葉で見張りの人に鉄の扉を開けてもらって、倉庫の荷物の陰にある玄関のドアからマンシヨンの部屋に戻った。

「いや〜やつは異世界より、日本の家が一番だよねえ」

旅行から帰った時の定番の台詞を言ってみる。

もちろん異世界も楽しいのだが、家が一番くつろげる。

「じゃあ着替えてトンスキホーテに買い物でも一緒に……わわわっ」

デイトに着替えを促そうとすると、洋室まで背中を押される。

「な、何？」

「ちよつと……休んでから」

「あ、ああ」

日本人の僕には、歩いてすぐのトンスキホーテに行っても疲れはしないけど、デイトにとつてはそうでもないのかもしれない。

「じゃあデイト少し寝る？ ベッド使っているよ。夕食の食材とクレープ買ってきてあげる

よ」

「違〜」

「へ？ 何が違うの？」

「も、もう……トオルと一緒に寝たいのっ！」

「えええええ！ わぶっ」

手で口を塞がれる。

「なにするんだよもがもがもが」

「大きな声を出したら、和室の押し入れにいるシズクに気付かれちゃうじゃない」

へ？ 確かにシズクは押し入れの、さらに言えば薄い本のダンボールの中が住み処になっているが、今はスライムアーマーとして革鎧になっている。

そういえば大人しいな。

「リアもミリイもないからいいじゃない」

「シズクがいるんだよもがもがもが」

「お願い！ 寂しいから一人で寝たくないのっ」

デイトが甘えた声を出しながら僕をベッドに押し倒す。

いつもの「ふんっ」って態度はどこにいったんだ。

デイトの手が口から頬に行つて、やっと喋れるようになった。

「ホ、ホントに寝るだけなのか？」



「うん。こうやってトオルが隣で寝てくれるだけでいいの……ふふふ」

「そ、それならまあ」

デイトは幸せそうに笑っている。

どうやら今はデレモードのようだ。ひよつとすると2人だといつもこうなのかもしれない。

僕は笑ってデイトの肩に手を回した。



トンスキホーテのベンチでデイトがうなだれていた。

「ううう……まさか革鎧がシズクだったなんて。どうして言ってくれなかったのよお？」

「デイトに口を塞がれたからでしょ」

「シズクも言ってくれなかったあ！」

「ダンジョンの地下1層ではシズクはあんまり話せないし、部屋に戻ってからは気を使ってくれたんじゃないのかな？」

よほどシヨックだったのか、好物のチョコバナナクリームすら口にしない。

「まあシズクには留守番してもらってるから、今度こそ正真正銘僕しかいないよ」

「そ、そっか」

「まあクレープ食べようよ」

「うん！」

ベンチで2人、笑いながらクレープを食べる。

「さ、シズクも待っているだろうし早く帰りましょうか」

「そうだね」

デイトは帰り道、また僕の腕をとった。

「ただいま」

「おかえりなさい。ご主人様、デイト様」

玄関にシズクが迎えに来るとデイトはもう僕から離れていた。

「あゝお腹減った。タオル、早く夕ご飯作ってよ！」

「えゝ？ クレープ食べたじゃない」

「あんなのじゃ全然足りない」

僕とシズクは顔を見合わせて笑った。

さて今日は肉野菜炒めでも作ろうかなと思っているとデイトとシズクの会話が聞こえてきた。

「シズクもクレープ食べたかったなあ」

「シズクのはお土産で買ってきたわよ」

「やったあ」

シズクの分だけじゃなく、もう食べているデイトの分もある。

「ご飯のあとにしよう」

僕が野菜を切りながらそう言ってもデイトとシズクは美味しそうにクレープを食べていた。

ご飯を食べてお風呂に入って、しばらく3人で話すともう0時近かった。

「もうこんな時間だ。そろそろ寝ようか」

「えーさつき1時間ぐらい昼寝したじゃない」

「でも明日バイトあるんだよ」

「ふんっ！ 久しぶりに私が来たのに！」

2人である時とシズクがいる時だと、まるで態度が違う。

「じゃあさ。皆でベッドで横になって話そうよ」

「でもご主人様はすぐに寝ちゃいますからね」

「えええ？ 皆でベッド？ 私は和室でお布団で寝るわよ」

さつき一緒に寝てたんだからデイトも誘って大丈夫かと思ったが、シズクの前ではダメの

ようだ。

「ってか、タオルとシズクはいつも一緒に寝てるの？」

「そうだよ」

シズクはバイト中や昼間は押し入れの中にいるが、夜はベッドで一緒に寝ている。

「シズク、デイト様と一緒に寝たいです」

「し、仕方ないわね……シズクは甘えん坊なんだから」

シズクがそう言うと、デイトも納得したようだ。

部屋着という名のブルマに着替えているエルフっ子がツンツンしていたのはベッドの外までだった。

「タオル……ありがとう」

ベッドの中でデイトはそう耳打ちした。ほっぺになにかを感じながら安心して眠りについてた。



「シズク、ただいまあ」

「あ、おかえりなさい」

シズクの可愛らしい声よりもだいぶ色っぽい声がかきこえる。色っぽいといっても別にトーンは普通なのだけど。

そして、もう聞き慣れた安心できる声だ。

玄関から姿が見えなくても誰だかわかる。

「あれ？ デイート？ まだダンジョン探索に行つてなかったの？」

「ふんっ悪かったわね。もう1日ぐらいいてもいいじゃない」

どうも自分はやはり少しコミュ障らしい。女性の機嫌を損なうことにはそこそこ自信あり。

「いや、そういう意味じゃなくてさ。バイト中にもうダンジョン探索に行っちゃったのかと思つて。まだいてくれて……嬉しいよ……」

「え？ べ、別に私、トオルのためじゃなくて、もう1日ぐらい休んでから探索に行こうと思つただけだしっ！」

デイートが赤くした顔を逸らす。まあ機嫌は直してくれたようだ。

「ふ、ふーん。ところでシズクは……？」

どうしたんだらう。僕が帰つてくるといつも嬉しそうに寄つてきておかえりを言ってくれるのに。

「じゃ、ジャンケンで勝ったから」

「へ？ ジャンケン？」

「い、いや違うの。リアと一緒にちょっと異世界に行くって」

「え？ リアも来たの？ 僕に会わずにシズクと一緒に異世界に行っちゃったの？」

「そ、そうよ」

「おかしいだろ？」

「あ、明日はリアだから」

あ、なるほど、把握。

高校の時は立石さんのような女の子と夕暮れの下校はできなかつたけど、僕は今青春を取り戻している。

「デザート」

「な、何？」

「マゲドナルドのハンバーガーを買ってきたから一緒に食べよ」

「あ、マゲルドの」

「そうだよ」

「で、でも」

でも？ きつとすぐに飛びつくかと思っていたんだけど。

調理台には、調理すればいいだけに切られている野菜や肉、調味料、そしてエプロンまでが折りたたまれて置かれていることに気が付く。

「ふっふんっ！」

い、いかん。せつかくの機会なのに、ツンを発動させてしまつては可哀相だ。

「何作ろうとしたの？ デイートの手料理か、楽しみだなあ」

「そ、そう？ 作るものはまだ内緒。うふふ」

「うんうん」

「できるまで休んでて」

デイートは楽しそうにキッチンに向かった。

ちよつとパソコンをしようとスリッパを解くと、料理サイトのナスと豚肉の味噌炒めの作り方がモニターに映った。

「できたよー」

しばらくすると、デイートが夕食ができたことを教えてくれた。

出てきた料理は、ナスと豚肉の味噌炒めだった。

「……え？ 意外と美味しい」

## 5 再開発地区で夜店祭りをする件

僕たちはお祭りから帰って、その足でダンジョンの地下1層の盗賊ギルドの本部に行った。ノエラさんにスマホを見せる。

「こ、これが日本のお祭りですか。すごいですね」

ノエラさんは最初スマホに驚いていたが、今はお祭りの動画を見て驚いている。

「しかし……なるほど。こんなお店ならば盗賊ギルドでも用意できますね。カラフルですけど、言ってしまうばただのテントですし」

「うん。売ってるものだって、日本の料理や物っただけで大したことはないです。こちらの世界にあるもので作れるんじゃないかな」

僕は異世界で用意できるものを使って集客することにこだわっていた。

日本の知識を使うのはいいけど、技術的に異世界で作れないものや存在しないものを売ったりすれば、僕の部屋の秘密がバレてしまうかもしれない。

それに最終的には独力で盗賊ギルドや孤児院に立ち直ってほしい。

僕とノエラさんで宣伝告知や夜店運営全体のことを話し合い、リアとデイトとミリイはど



んな店舗がいいか話し合うことにした。

「現状、再開発地区は綺麗になって逆に閑散としますね。ただの広場みたいになってしまつて子供が遊んでいません」

「いいんじゃないの。まずは子供が楽しそうにしていれば大人も興味を持つよ」

「なるほど。そういうものかもしれませんね」

日本で子供を集客するのは親を連れて来るためでもあるが、親を連れて来ない孤児でも楽しめるのは集客のためにいいことだと思う。

とにかく異世界には娯楽が少ない。ダンジョンの地下1層にはインモラルな娯楽は多いけど、それはむしろ特別なのだ。

「再開発地区はヘラクレイオンの街中にある出入り口にも近いから、地上の人の集客も見込めますよね」

「うん。それも目指してるんだ」

「そのためには、地上の人にもお祭りをすることを知ってもらわないといけませんけど」

それについて僕には考えがあった。

「チラシを作るといいと思うんだ」

「チラシ……ですか。かなり資金がかかりますね」

異世界では紙は高級品だ。チラシも基本手書きで作らなければならない。

しかし、異世界でも手書きであればコストと時間をかければ、チラシを作れないわけではないのだから、ここは日本の技術を使わせてもらおうかと思う。

プリンターで印刷したようなものでも、十分に珍しがって手に取るだろう。

「ところで、盗賊ギルドって言ったら思い浮かぶ人って誰ですか？ 商人ギルドや傭兵ギルドに対しても有名な人がいいんですけど」

「え？ そうですね。ミリイは首領であることを隠しているわけですし」

「ひょっとしてノエラさんじゃないですかね？」

「……やっぱり私ですかね？」

ノエラさんはちよつと細目だけどなかなかの美人だし、適任だと思う。

「ちよつといいですかね？」

「な、何ですか？」

スマホをカメラモードにしてノエラさんに向けて。

——カシヤツカシヤツ

「うん。いいですね、とても」

「な、何がですか？」

「見てください」

ノエラさんの画像を見せた。

「ちよつちよつと、なんですか？ これ！」

「スマホはさつき見せたように動画も撮れるんですが、こういう静止した画像も撮れます」

「そ、そうなんですか。どうして私の画像を!？」

「実は日本だと、チラシってかなり安く作れるんです」

「それと私の画像がどう関係するんですか？」

最近、知ったのだが、立石さんは萌え絵もかなり上手い。

僕と店長の絵をライメで送ってきてくれたこともある。

自分の絵のことはよくわからないけど、店長の絵は特徴をよく押さえていた。

「チラシにノエラさんの絵を載せたら、盗賊ギルドがやっているって分かっているいいんじゃないかと」

「えー！ 私のですか？」

「そうそう。紙の印刷物が貴重な異世界の人なら、ノエラさんの萌え絵が描いてあるだけで皆欲しがらんじゃないかな」

「なんですか？ その萌え絵って？」

「こういうのっす」

スマホで適当に萌え絵を検索してノエラさんに見せる。

ノエラさんの細い目が見開く。

「な、なんですか？ 私がこういう絵になるんですか？」

「ええ。宣伝チラシの端にちよつと描くだけけど。ダメですかね？」

「ちよつと、さつき撮った画像を見せてください！」

「は、はい」

ノエラさんはしばらく自分の画像と萌え絵を見比べて言った。

「撮り直しましょう！」

「え？ なんで？」

「ポーズがダメだと思います」

「いやまあ、ポーズは絵を描いてくれる人が上手くやつてくれるから」

「ダメです！」

そうこうしていると、リアたちが考えた屋台の案を持ってきた。

「じゃあ、ノエラさんに画像の撮り方教えますから、盗賊ギルドの人に撮影してもらってくだ

わさ」

「分かりました」

納得できる画像が撮れるまでノエラさん戦力にならなそうだぞ……。

その間に僕はリアたちの屋台の案を見ることにした。

「私はりんご飴です」

「うん。いいんじゃない？」

りんごも砂糖も異世界にある。

砂糖は高級品らしいから、しばらくは日本から仕入れてもいいしね。

デイトはなにを作るか分かっている。

「クレープだろ」

「よく分かったわね」

「バナナとチョコはなさそうだ」

「う……生クリームだけでもいいわ」

生クリームか。ヘラクレイオンから孤児院の方面は乳牛の牧畜が盛んだから、それは可能か

もしれない。

それに、意地悪しちやっただけど、異世界にもクレープに合う果物ぐらいあるだろう。

「やってみようか」

「やった！」

他には、たこ焼き、焼きそば、お好み焼き、じゃがバター、フランクフルト、唐揚げなども候補に入っていた。

「この辺も材料がありそうだからできそうだね」

食べ物系以外はくじ引き、綱引きか。

「あれ？ 金魚掬いが入ってないの？」

たらいに入れてある金魚が跳ねた。ミリイが金魚掬いで取ってきたものだ。

ミリイが口を尖らせる。

「そうだよーツール聞いてよー、皆が反対するんだよ」

リアとデイトの話を聞くと異世界に金魚はいないらしい。たしか金魚は観賞用に交配させて作ったらしいから当然かもしれない。

デイトが言った。

「ペットなんて一部の貴族しか飼わないしね」

そりゃそうか。庶民までもがペットを飼えるなんて、地球だって一部の地域だけだ。

ちなみに立川市は十分に庶民がペットを飼える地域だと思うが、僕は個人的にちよつと飼えそうにない。

「絶対絶対絶対絶対絶対、金魚掬いはお客さん来るよ！」

「う、うーん」

「でも、肝心の金魚がいらないじゃ……」

「七色魚なないろうおがいるよ」

「七色魚？ なにそれ？」

「なんでも食べるし、捕まえても生命力が強いからなかなか死なないうって聞いたよ。七色魚で金魚掬いをすればいいよ」

なるほど。ペットにはちようどいいかもしれない。

「七色魚ってどこにいるの？」

「さあ？」

ミリイは知らないらしい。

やっぱり金魚掬いは無理かなあと思っていると、ディートが知っていた。

「七色魚ならダンジョンの地下7層にいるわよ」

「え？ そうなの？」

話を聞いてみると、ヨーミのダンジョンの地下7層は湖と島の階層と呼ばれているらしい。

7層はプールのようになっていて、島が点在しているのだそうだ。

「ちょっとした森がある島もあって、その中心の泉に七色魚はいるの」

「へー」

「パンくずとかを泉に入れると、七色魚が食べに来て可愛いの」

なるほど。そこまで行ければ、捕まえるのも簡単そうだ。行ければ。

「でもダンジョンの危険って、地下に行くごとに加速度的に上がっていくんだろ？」

「基本的にそうね」

リアもディートもなんの理由もなく反対しているわけではないのだろう。

ミリイもダンジョンの危険はわかっているのかシュンとしている。

「……ディート、俺たち4人で行っても危険かな」

「えええ？ 行くの？」

ディートの不満声に対して、ミリイの顔がぱつと明るくなる。

「ああ。客が来ない店があっても、いろんな店があった方がいいと思うんだよ。で、危険なの？」

「まあ、この4人で慎重にいけば危険は少ないかな」

「やっぱりさ、皆が好きな店があった方がいいと思うんだよね」

ディートは呆れたように言った。



「はいはい。そうかもしれないわね。クレープの店も作ってもらえるんだし。でも大丈夫なの？」

「何が？」

「ミリイを多少なりとも危険な冒険に連れて行って。盗賊ギルドのお姫様なんですよ？ そういえばお目付け役さんは？」

「デートがそう言った時にノエラさんが戻ってきた。」

「で、できました！ これでどうでしょう!？」

「なんのことか分からないデートとミリイが顔を見合わせる。」

「スマホの画像フォルダにはノエラさんの奇跡の1枚が写っていた。」

「よく撮れていますね……」

「でしよう？」

「いかにもやり手の秘書といった風のノエラさんは満面の笑みだった。」



「行ってらっしゃい！」

「行ってきまゝす！」

お留守番のシズクに挨拶して、マンシヨンの部屋からダンジョンに出た。

ヨーミのダンジョンの地下7層の泉にいる七色魚を捕って夜店の金魚掬いに使うためだ。

思えば、異世界の地上に出るためにパーティーを組んでダンジョンを上がっていったことはあるが、より深い階層に潜るのは初めてになる。

マンシヨンは一度使った入り口から自由に出入りできるので、僕らは目的地の地下7層に近い5層へ出た。

地下5層は、石のブロック壁でできた遺跡風の階層だ。出現モンスターはバラエティに富んでいる。

ちようどリアが真銀の剣で、大ねずみとお化けキノコの頭を斬り落としたところだ。

ふと、途中で通ることになる6層がどんな場所か気になった。

「1層は主に地上で生きられない人の街だよね」

「ええ、そうですね」

「そうね」

リアとデートが頷く。

「にゃっ!? 盗賊ギルドの人たちは皆いい人だよ！」

盗賊の組合に加入している人たちを「皆いい人」と主張されてもな。

僕はミリイを無視して話を続けた。

「地下2層は森の階層、3層は城、4層は根で、5層はここでしょ。7層は湖と島だったよね。地下6層はどうなってるの?」

ディートが教えてくれた。

「地下6層は要注意よ」

「そ、そうなの? 7層よりも?」

「うん」

普通、ダンジョンは、階層が下に行くごとに危険になっていくらしい。

だがディートが言うには、6層は7層よりも危険という。

「7層は水上歩行魔法ができるならそれほど危険はないわ」

「なるほど。進むのは困難だけど危険は少ないのか。6層にはなにが?」

「知恵があつて群れる魔物の住み処なのよ。オーク、コボルト、ゴブリン……戦う時も群れで襲ってくるが多いわ」

「それ、やばいじゃんか」

「オーク、コボルト、ゴブリンの間は仲が悪いけどね」

モンスターが群れて襲ってくるという話はかなり危険を感じる。

ゲームでは数種類のモンスターが襲ってくるけど、よく考えれば、複数や特に別種のモンスターが人間のように協力して襲ってくることは少ないだろう。

よく考えてみれば、地球でもクマとトラとライオンが協力して人間を襲うなんてことはない。その前にクマとトラとライオンで喧嘩になってしまうだろう。

だから、群れてモンスターが襲ってくる6層はとても危険なのだろう。

「それに6層のモンスターは人間を……そういう目的で捕らえるって噂もあるの」

「そういう目的？ まさか、ひよつとして……女性を？」

リアたちが捕まったらと思うと身震いした。

「女だけじゃなくて男も捕まるらしいわよ」

「男も!？」

「トールは可愛い顔に見えなくてもないから捕まっちゃうかもよ。メスのゴブリンやオークもいるしね」

マ、マジかよ。僕はさらに身震いした。

しかしダンジョンの7層までの様子はわかった。

我が家と繋がっているヨーミのダンジョンの各層はこのようになっていた。

地下1層…地上で生きられない人間の街。3つの地下ギルドが勢力争いをしている。モンスターはほとんど出ない。

地下2層…森の階層。太陽苔がダンジョンの天井まで覆い、その光が森の中に木漏れ日のように降り注ぐ。モンスターは青スライムなど。

地下3層…城の内部のような階層。時空が歪んで現れたとも、もともとあった城が地下に沈んだとも言われる。モンスターはスケルトンなど。

地下4層…巨大な植物の根に侵食された自然洞窟のような階層。もともとは石張りの壁だったが、根によって破壊されて地肌が見えている箇所が多い。モンスターは大ねずみなど。

地下5層…遺跡風の階層。石のブロックでできた直線の通路と直角の曲がり角と、たまに部屋のような空間がある。モンスターはバリエーションに富んでいて、まれに出現する大ムカデが強い。

地下6層…5層と同じように遺跡風だが、群れるモンスターが多い階層。モンスターはオーク、コボルト、ゴブリン。

地下7層…湖と島の階層。湖といっても、遺跡風の空間にほんのりと光る水が張られていて、そこに島が点在しているらしい。進むには水上歩行の魔法かカヌーが必須。モンス

ターはアンモナーなど。

デイトに6層の攻略法を聞いてみる。

「6層のモンスターはどうしたらいいの？」

「まず出くわさないことね。ダメだったら逃げることに。戦闘になって仲間を呼ばれたらキリがないし」

「えええ？ 大丈夫なの？」

「奴らは頭からいいから、襲うと被害が大きそうなパーティーは積極的には襲わないの。よほどテリトリーに深く入り込んだり、こちらから攻撃を仕掛けなければ大丈夫よ」

「なるほどね」

逆に言うと、テリトリーに深く入り込んだら危険ということか。

ただ地図を持つての先導はデイトがしている。任せておけば安心のハズだ。

しかし、僕はなにか忘れていることがあるような気がした。

パーティーはリアが壁と物理攻撃、デイトが魔法攻撃、ミリイが感知や探索をしているので、僕の出番はあまりない。

今も荷物持ちになってしまっている。考え事をしながら歩いても大丈夫だろう。

オークにコボルトにゴブリンか。どんなモンスターなんだろう。

## 6 大成功したのに窒息しそうになる件

僕たちは既にオークの村からマンションの部屋に戻っていた。

「じゃあ、私たちは行ってきますね」

「はい。行ってらっしゃい」

リア、デイト、ミリイは地下1層に行つて夜店祭りの準備をしてくるそうだ。

3人を見送つてから、夜店のマニュアルを作るために、食卓に使っているテーブルに戻る。

隣では立石さんが、いつもはバイト先の連絡帳で活躍させているイラストを描いていた。イラストのモデルは盗賊ギルドを取り仕切っているノエラさんだ。

そのノエラさんは向かいでチラシの文言と、夜店を開く地下1層の場所の地図を作っていた。誰も言葉を発せず黙々と作業している。しばらくすると僕のスマホがブーブーと振動する。

あやめ『ノエラさんのキャラデザでできましたよ○(Ⅳ△Ⅲ)○』

ノエラさんらしきイラストの正面、横、後ろ姿。立石さんはチラシに入れる絵なのにキャラデザから作つてたのか……。

しかも、クオリティはかなり高い。

同人誌即売会でも結構いい線イケるんじゃないだろうか。

「こ、これが私ですか？」

ノエラさんは自分のイラストというか、デフォルメ絵というか、萌え絵に驚愕している。

「か、可愛いですけど、私こんなですかね？」

「特徴出ていますよ。日本の萌え絵ですよ」

「そ、そうですか。チラシに効果として現れたらいいんですけど」

「きつと効果絶大ですよ！」

日本の萌え絵は西欧でもウケてるんだから、きつと異世界でもウケるに違いない。

僕たちはまたマニュアルやチラシの制作に戻った。シズクが足元にやってくる。

「ご主人様へペットフードが切れちゃったんで、ダンジョンに行ってきます」

「あ、ありがとー。行ってらっしゃーい」

「はーい」

僕がマニュアルを作っている間も、パソコンは自動レベル上げプログラムを稼働させていた。

オークたちも江波さんを通して、ペットフードが動物性の食べ物だと理解してくれただろう。

もう江波さんやベジタリアンのオークたちが罨にかかってしまうことはない。

罨の餌が切れるとシズクが補充しに行ってくれる。



「ただいま」

「ありがとうシズク」

僕はまたパソコンをいじって、自動クリックのマクロツールを起動する。自動レベル上げシステムはまた稼働しはじめた。

僕はできるだけ24時間レベル上げをして、リアやディートに追いつこうと思っていた。そうすれば、もっと彼女たちとダンジョンを冒険できるのだ。

テーブルに戻って、またマニュアル作りを始める。よし、りんご飴屋はいいだろう。今度はクレープ屋だ。しばらくすると。

「チラシの文言と地図ができました」

「あやめ『私も絵できました(\*v^v\*)』」

ノエラさんと立石さんが同時に仕事を終わらせたようだ。

「それじゃあ画像編集ソフトでパパッと2人が作ったものを合成して見本を作ってみようか」  
「はい」

「あやめ『楽しみ(´▽`)コンコパ』」

とりあえず、パソコンの自動レベル上げを止めて、立石さんが描いてくれた絵とノエラさんが作ってくれた文章と地図を複合プリンターでスキャンする。

そして画像編集ソフトを起動して、チラシに当て込むのだ。

チラシの文字と地図は異世界のフランシス国の文字と地下1層の地図なので、僕が萌え絵をスペースに配置しても、正確には文言や地図と合っているかはわからない。

「ノエラさん、この2頭身キャラ絵はここに配置しちゃってもおかしくないですか？」

「はい。いいと思います。それにしてもパソコンっていう機械は便利ですね」

「ええ。他にもいろんなことができますよ。ところでこの指差し確認している絵はここに配置しちゃっても大丈夫ですか？」

「なにか胸が大き過ぎはしませんかね？ 私そこまでは……」

萌え絵は胸をかなり大きく描くもんだしなあ。けど本人からしてみたら、申告に重大な嘘があるような気分かもしれない。

後ろを振り向く。もちろん僕がパソコンを操作しているのを覗き込むノエラさんがいる。

結構大きいじゃないか。まあいいや。

「萌え絵の胸の範囲を選択して、こうすれば」

画像の一部を選択して、その選択範囲の大きさを変えるツールを使った。

胸部を選択して小さくする。

「あ、胸が小さくなった」

「このぐらいの大きさですかね？」

「今度はちょっと小さ過ぎかも」

もう少し大きくした。

「あ、大き過ぎですかね」

また小さくする。

「こ、今度は小さ過ぎかも……」

段々変な気分になってきた。

パソコンではなく本物をいじりたいと思いつつ、この微妙な調整に30分ぐらいかかった。

「バッチリです。でもこの指差し確認の絵、左向きになっているけど、右向きの方が良かったかもしれませぬね」

「左右反転もできますよ」

「す、すごい！」

「じゃあ完成ですね。印刷してみましよう」

プリンターがガチャガチャと音を立てて紙を1枚吐き出した。

「も、もう出来たんですか？」

「ええ。家庭用複合プリンターで作ったものなのでそれなりだと思いますけど……おお！ い

いじゃん！ 異世界の言葉だから読めないけど」

ノエラさんがマジマジと見ている。

「驚きました。パソコンにもプリンターにも。チラシ自体もよくできています」

「よし。じゃあ印刷しようか」

プリンターがガチャンガチャンとフル稼働しはじめた。ついでにレベル上げの罫もまた稼働しはじめた。

「ノエラさん、立石さん、ありがとう。あとは印刷するだけだから」

立石さんはどういたしましてと絵文字で伝えてきた。ノエラさんは深々と頭を下げた。

「とんでもございません。トオル様はすべてギルドのためにしてくださってことで。印刷も莫大な資金がかかるでしょう？」

「いや、莫大とか資金ってほどでも」

異世界では紙も貴重品だし、印刷物となれば、なおさらお金がかかるらしい。

というか、基本人間の手で複写しないとイケない。日本ではもちろん印刷にそこまでお金はかからない。

まあ、プリンターのインクはそれなりに高いか。

もちろん詰め替えインクを使っているけど、1枚10円ぐらいはしそうな気がする。紙代は約

0・5円だ。3000枚刷るから3万5000円か。意外と莫大な資金かも。

異世界の文字だ！とは気が付かないだろうけど、なんとなく業者には頼みにくいし……。

「そ、そうですか？　しかしなにかお札を……ミリイから、金貨は日本でも価値があつて換金できると聞いています。金貨ではどうでしょう？」

「確かに価値はあるんですが、日本では頻繁には換金できないですよ」

あの大手買い取りチェーンが日本中でしている換金量に比べたら微々たるものだ。それに本物の金なんだから、溶かしてまたアクセサリーになろうがなんの問題もないけど、あまりやり過ぎてここがバレるのも困る。

「そうだ。トオル様は女性はお好きですか？」

「え？　ええ……まあ好きですけど」

「それならちょうど良かった」

「なにが？」

「先代から私が頼まれたミリイに手を出されるのは流石さすがにどうかと思つていたんです。でも盗賊ギルドにも年頃の女性が結構いますよ」

「いいっ!？」

「盗賊ギルドが経営しているその手の店もありますし。ミリイ以外、誰でも使ってください」

「お、お礼ってそれ？」

「はい。トオル様にはこれぐらいしかお返しできなくて申し訳ありませんが」

義賊でもやはりアウトロー組織だな。

「ミリイ以外なら誰でもいいんですか？」

「まあ嫌だと言われれば申し訳ありませんが。でも私がうまく事情を話せば、興味を持つ子の方が多いと思いますよ。お店ならお金の方はこちらで。トオル様はきっと大人気ですよ」

いや、僕が閃いたのは遠いおっぱいではなく、近いおっぱいなのだ。先ほど何度も何度も大きさを調整させられたおっぱいが……。

盗賊ギルドを実質仕切っているインテリ風女性のおっぱい。ちょっと年上のおっぱい。

「あの……ノエラさんのおっぱい揉むってアリですかね」

「いいいいいいっ!? 私の胸ですか？」

「ええ……」

「ま、まあ誰でもと言ってしまった手前、私はダメだと拒否するのも。別に胸ぐらいなら」

マ、マジかよ。アウトロー万歳！ 盗賊ギルド万歳！

——ブーンブーン

「はっ！」

スマホのバイブレーションで、立石さんがいたことを思い出す。冷たい目で見られていた。「じよ、冗談に決まってるじゃん」

あやめ『アヒヤンヘヤニシム(目)X( )☆マカニ( )□( )』。

ちなみにノエラさんは、後でこっそり「他の女性の前で申し訳ありませんでした」と胸を確認させてくれた。アウトローは最高だ。盗賊ギルド入っちゃおうかな。



リアとデイトとミリイが帰ってきた。今もガチャガチャと音を立ててプリンターがフル稼働している。

「おっ、また身体から力が湧いてきたぞ！ レベルアップだ！」

「レベルアップおめでとうございます！ ご主人様」

シズクが僕のレベルアップを祝福してくれる。

プリンターがフル稼働している間も、パソコンはクリックマクロで経験値を稼いでいた。

「便利な生活道具に、自動レベル上げ。印刷機械に、白スライム……ここは一体どうなっているんですか？」

休憩所

になってしまった件

3

僕の部屋がダンジョンの

試し読みはここまで  
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

[http://books.tugikuru.jp/detail\\_bokudan.html](http://books.tugikuru.jp/detail_bokudan.html)



東国不動  
イサト JUNA